

帰郷から観光へ

——パプアニューギニア華人の訪中経験の変容過程——

From Homecoming to Tourism:

Transformation Process of Papua New Guinean Chinese Visit to China

市川 哲*

Tetsu Ichikawa

Abstract

The aim of this paper is to examine the meaning of homeland of Chinese overseas. To discuss this topic, this paper will take Papua New Guinean Chinese as a case study and analyze the transformation process of their visit to China. The Chinese community in Papua New Guinea has been existed since 19th century. The Chinese arrived at German New Guinea as colonial labors. Their homelands were some villages in *Siyi* area, Canton province. After World War I Australia took over the German New Guinea. Under the German and Australian rule, some Chinese brought their spouses to New Guinea and other married local people. As a result, the local born generation increased gradually in New Guinea. Before World War II, some of the local born children were sent to China for their education. However, in 1960th Australian government changed their White Australia Policy and admitted the Chinese in New Guinea to acquired Australian citizenship. After obtaining the Australian passport, the Chinese in New Guinea started sending their children to Australia for high education. Since the eve of the independence of Papua New Guinea in 1975, these Chinese re-migrated to Australia and settle in some cities such as Sydney and Brisbane. These localized Chinese also visit China since the People's Republic of China had opened its door to overseas since 1978. Although many Papua New Guinean Chinese visited China now, most of them do not visit their ancestors' villages. Instead they visit touristic places in China such as Beijing, Shanghai, Guilin, Yun'nan, Hong Kong, and Macau. Their visit to China changed its meaning from homecoming to tourism.

Keywords : Chinese overseas, Papua New Guinea, China, homecoming, tourism

I 問題の所在

本稿は海外に居住する中国系住民（華人）¹が、かつての出身国である中国を訪問する際の経験

*立教大学 AIIC 助教

に注目し、訪中にまつわる観念と実践について検討することを目的とする。そのための事例としてパプアニューギニアの華人を採り上げ、彼ら彼女らの訪中経験が、いかなる変遷を遂げているのかを論じる。この問題を考察するために、本稿は彼ら彼女らの訪中経験が、中国生まれの第一世代やパプアニューギニア生まれの第二世代や第三世代といった世代を経ることにより、如何なる変化を遂げて来たのかという観点から明らかにすることを試みる。結論を先取りしていうと、中国からニューギニアへと移住していった世代や中国で留学・生活した経験を持つ世代にとっての訪中が、自己の出身地の訪問という性格を強く持っていたことと比較し、パプアニューギニア生まれの世代にとっての訪中は、必ずしも出身地の訪問やルーツ探しという性格は強くなく、むしろ観光の一環としての性格を強く持つようになってきたことを論じるのが本稿の目的である。

海外に居住する華僑華人による中国の訪問は華僑華人研究の中でしばしば採り上げられる研究テーマであった [e.g. 可児 1996; 山下 2002; 山岸 2005; 庄 2000; 周・柯 2003; Douw, Huang & Godley 1999; Kuah 2000]。これらの研究は「僑郷」の研究と言いかえることが可能である。

「僑郷」とは華僑の故郷の意味であり、歴史的に大量の出国者を生み出してきた広東省や福建省、海南省等の移民送出地域を指すことが多い。「僑郷」を対象とする先行研究の多くは、僑郷が移民のアイデンティティや生活様式の中でいかなる位置を占め、また僑郷と海外の華人社会がいかなる関係を取り結んでいるのかといった問題を取り扱う傾向があった。

僑郷に代表される華僑の故郷と華人社会との関係は、歴史学や経済学、社会学、地理学、人類学等、様々な学問分野が注目してきたが、これらの研究には大きく分けて二つの傾向があると思われる。一つは中国から海外へと移住して行った人々のアイデンティティの中に僑郷が占める位置を重視する研究である。これは特に移民第一世代や移住先でも中国的な文化やアイデンティティを保持している華人を対象とする研究に顕著に見られる。もう一つは海外の華僑華人による中国の訪問そのものに注目し、その経済的な投資や故郷の親族の訪問、宗教活動や文化活動等を対象とする研究である。これはその研究の視座をより中国の僑郷の側に置いているという特徴がある。これらの研究はそれぞれ強調する点が異なるものの、海外在住者が自己あるいは祖先の出身地を訪問し、親族関係の維持や地縁の確認を行うことにより、中国人アイデンティティが保持されることを重視するという性格を持っている。だがこのような研究枠組みは、中国を訪問する華人の中でも特に中国に対するアイデンティティを強く持つ人々に注目する一方で、それほど中国に対するアイデンティティを持っていない人々の経験を扱わないという点で限界も存在する。実際に海外に在住する華人が中国に対し強い愛着を持つのは一般的な現象であり、中国が彼ら彼女らのアイデンティティの中で多大な位置を占めている。だがこのような状況を過度に一般化する姿勢からは、個別の華人が置かれた状況を軽視し、華人の訪中経験を均質的な存在として理解してしまう恐れも生じてしまう。必要とされるのは、世界各地の華人社会の中に存在する多様性を無視することなく、彼ら彼女らの中国に対する関係性を個別実証的に理解する姿勢である。

華人の中に存在する共通性と差異性の双方に注目する視点は、特に華人を対象とする文化人類学的な研究で多くみられる。例えば華人を対象とする文化人類学的研究を行うタン (Tan 2007) は、世界各国の華人が均質的なトランスナショナルネットワークを形成するということは実情に

合っていないということを強調する。タンは世界各地のそれぞれ異なるアイデンティティを持つ華人を捉えるために CDN (Chinese of Different Nationalities) という表現を用いることを提唱する [Tan 2007]。彼が CDN という用語で表現するように、それぞれの華人の居住地や国籍、現地化といった背景を視野に入れない限りは、華人の訪中の性格も理解することは困難である。世界各地の華人がそれぞれの地で異なる現地化を遂げると同時に、そうして異なった現地化を遂げた華人が取り結ぶ中国との関係も、それぞれ異なっていることを無視することはできない。

このような現地化した華人と中国の僑郷との動的な関係を対象とした文化人類学的研究として、ここではルイ (Louie 2003) の研究をあげてみたい。ルイは中国の僑郷を訪問するアメリカ華人を取り上げて論じている。彼女は広東省で開催された海外華人の青年向けの祭典に参加したアメリカ華人の経験を事例とすることにより、上記の問題について考察する。彼女は、アメリカ系華人の故郷認識や自己認識と、現地の村人からのアメリカ系華人に対する観念の間に存在する相違点を指摘する。そして彼女は、アメリカ華人は自己のルーツ探しとして中国を訪問するが、これは必ずしも自己のルーツの確認だけでなく、自分たちがアジア系アメリカ人であることを再認識させる契機になっていると論じる。さらに彼女は、訪中経験がアメリカ華人にとって自己のアイデンティティの再確認をすると同時に、観光的な性格や目的も同時に持っていることを指摘している。

タンやルイの研究からは、華人と中国との関係を固定化して捉えず、その動的な性格を理解するための枠組みを得ることができる。前述のように、華人と中国との関係を固定的に把握するのではなく、異なる地域における華人の現地化と世代ごとの変化が、中国との関係を変化させるという現象を把握するためには、それぞれの華人が居住する地域の具体的な背景や世代間の認識の変化、使用言語やネットワークの違いといった観点から研究するための研究枠組みが求められる。

現地生まれの世代の増加により、移民内部の性格が変化し、それにより出身地に対する観念も変化することはしばしば指摘されている。次に求められることは、ではそのような移民の地域差や世代差が、如何にしてかつての出身地に対する関係を変化させているのかという具体的な状況を跡付ける作業である。以上の問題意識に従い、本稿ではパプアニューギニアの華人を事例として選択することにより、彼ら彼女らの訪中経験にまつわる観念と実践の両方から、中国との関係を検討することとする。それにより、移民の現地化の諸相を、出身地との関係性の中で捉えることを試みる²。

II パプアニューギニアの華人社会

本論に入る前に、パプアニューギニア華人とは誰かという問題について述べておきたい。パプアニューギニアの華人とは誰かを確定する作業は困難である³。

一つ目の理由は、彼ら彼女らが生活する空間がパプアニューギニア国内だけで完結していないからである。現在のパプアニューギニアに居住する華人の中にはパプアニューギニアだけでな

く、自己の出身地に頻繁に戻る者や、パプアニューギニアを経てオーストラリアやニュージーランド、オセアニアの他の島々へと再移住する者も珍しくない。特に地理的にも近いオーストラリアに頻繁に渡航し、不動産を所有してパプアニューギニア・オーストラリアの二か所で生活する華人も珍しくない。

二つ目の理由は、パプアニューギニアには複数の地域出身の華人が存在することである。いわば、華人社会の中に下位集団が存在するのである。例えば植民地期からパプアニューギニアに居住してきた華人がいる一方で、近年はマレーシアやインドネシア、香港、台湾、中華人民共和国といった様々な国々から華人ニューカマーが到来してきている。これらの華人はそれぞれ異なる地域的背景と文化的特徴を持っており、また使用する言語も異なるため、必ずしもお互いの意思疎通は容易ではない。例えば植民地期から居住してきた華人は広東語の四邑方言を使用し、その他にも英語やメラネシア・ピジンを話す。マレーシア華人は福建語や広東語、客家語といった中国語方言や華語（標準中国語）、さらには英語や居住地の言語であるマレー語も理解するといった多言語能力を持っている。他方、近年になり中華人民共和国からパプアニューギニアに到来する人々はその多くが英語を理解せず、標準中国語や自己の出身地⁴の方言のみ理解する。このような状況では、それぞれの華人が必ずしも共通の言語を知っているとは限らず、またそれぞれが生まれ育った地域ごとの生活様式の違いは、それぞれの華人が共通した団体や活動に属することを困難にする [Ingليس 1997 ; Chin 2008]。

本稿ではこのような華人社会の下位集団の中でも、特にパプアニューギニア生まれの華人を事例として選択することとする。

パプアニューギニアにおける華人コミュニティは植民地時代から存在した。ニューギニア島はドイツ、イギリス、オーストラリアによって植民地化されたという歴史を持つ⁵。ドイツはニューギニア島の北東部を自国の植民地として統治し、植民地労働力として中国人移民を導入した。ドイツ領植民地で華人は主にプランテーションの労働者や大工や機械工、商工業従事者としてドイツ領ニューギニアに移住してきた。これによりニューギニア北東部の各地に華人はコミュニティを形成した。1914年の第一次世界大戦勃発とともに、ドイツ領ニューギニアはオーストラリア軍によって接収されたため、華人もオーストラリアの統治を受けることとなった。ドイツおよびオーストラリア統治下で、華人は次第に定着的なコミュニティを形成し、現地化していった [Wu 1982]。

パプアニューギニアにおける華人の現地化にはいくつかの特徴がある。ここではその特徴について述べてみたい。一つ目はパプアニューギニアで数世代を経ることによって得られた土着化の過程である。二つ目はオーストラリア国籍を取得して以降のオーストラリア的な生活様式の獲得である。

第一点目について見てみたい。植民地初期の華人は圧倒的に植民地労働力としての単身男性が多数派を占めていた。これらの男性はニューギニアでの生活が確立すると、現地のメラネシア人女性と結婚したり、中国から配偶者や子供を呼び寄せたりした。それにより華人は次第にニューギニアに定着し、現地生まれの子供が増加するようになった。第二次世界大戦以前には、現地

生まれの子供たちの中には中国や香港に送られて教育を受ける者も存在した。そのような子供たちの中には、中国や香港で中国語教育を受け、中国での生活を体験することにより、ニューギニアに戻ってからは華人コミュニティの中で「中国文化」を保持する役割を果たした。いわばこの時期の華人は中国との関係を維持することにより、華人としてのエスニシティを保持し続けたのである。だがそれと同時に、現地生まれの華人たちは、メラネシア人との婚姻や社会的な関係を通じ、次第にニューギニアを志向した性格や生活様式を獲得するようになっていった。またドイツやオーストラリア統治下のニューギニアではキリスト教宣教師が積極的に活動していたこともあり、ニューギニアの華人たちの多くがキリスト教に入信した⁶。このように、ニューギニアにおける華人コミュニティは、他の民族との婚姻や社会関係、ニューギニアでの生活経験と宗主国オーストラリアからの影響を受けることにより、独自の現地化を遂げるようになった。

第二点目について見てみたい。オーストラリアは1957年以降、自国の植民地に居住する華人がオーストラリア国籍を取得することを認めるようになった。それにより1960年代までには、ニューギニアに居住するほとんどの華人がオーストラリア国籍を取得するようになり、オーストラリアへの渡航に関する法的な制限がなくなった⁷。また第二次世界大戦以後は、中国国内における国共内戦や中華人民共和国成立等の政治的・社会的混乱により、ニューギニアの華人が中国に子供を送って教育を受けさせることが困難になった。このような状況の下、オーストラリア国籍を持つ華人たちは、子供たちを中国ではなく、オーストラリアの寄宿学校に送り高等教育を受けさせるようになった。数年間にわたるオーストラリアでの教育により、華人たちは次第に自分たちの間の共通語として英語を使用するようになっていった⁸。さらにオーストラリアでの数年間の生活経験により、オーストラリア的な生活様式を身につける華人が増加した。だがパプアニューギニアが独立する以前には、これらの華人学生たちは卒業後はニューギニアに戻り、家族が経営するビジネスに参加するのが一般的であった。このような背景から、ニューギニアで暮らしながらも、オーストラリア的な生活様式や英語を使用する華人が増加するようになった。居住地であるパプアニューギニアと、宗主国であるオーストラリアの双方からの影響を受けることにより、パプアニューギニアの華人は、中国に民族的出自を持つ者としての自己のエスニック・アイデンティティを保持すると同時に、次第にニューギニアとオーストラリアの双方からの影響を受けた生活様式やローカルなアイデンティティを獲得するようになっていったのである。

このようにして次第にパプアニューギニアで現地化していった華人たちは、パプアニューギニア独立前後から、オーストラリアへと再移住するようになった。パプアニューギニアは1975年に独立したが、華人たちは新たな独立国における外国籍のエスニック・マイノリティとしての自己の立場に不安を感じるようになった。そのため独立直前から多くの華人がパプアニューギニアを離れることを選択したが、ここで彼ら彼女らが中国ではなく、オーストラリアに再移住したことに注目したい。これは彼ら彼女らの国籍が中国（中華人民共和国、中華民国）ではなく、オーストラリアであったこと、また既にほとんどの者がオーストラリアでの教育経験を持っていたことが大きな要因となっている。パプアニューギニア独立後も華人の再移住は継続したため、現在ではオーストラリアに居住する者の数は、パプアニューギニアに居住し続ける人々よりも多くなっ

ている。これらの華人が主にシドニーやブリスベンといった東海岸の諸都市に居住し、コミュニティを形成している。

このようにパプアニューギニアの華人は、19世紀末から20世紀を経て21世紀に至るまで、中国広東省からニューギニア島を経てオーストラリアへ、という段階的な移住と定住を経験してきたのである。前述したようにパプアニューギニア華人はその多くがニューギニア生まれであり、また現在ではオーストラリアに居住する者が大半を占める。そのため生まれ育った地であるパプアニューギニアを自己の生まれの故郷として認識し、またオーストラリアを自己が将来にわたって住み続ける地として認識している⁹。しかしながら、パプアニューギニア華人は中国に自己の民族的出自が存在していることも認識し続けている。また特に若年層の間では英語が事実上の母語となり、中国語の読み書きはおろか会話もできないものが珍しくないが、それでも自己の祖先の出身地としての中国を意識し続けている。パプアニューギニアにおける現地化や、オーストラリア的な生活様式の獲得により、中国に対する関係や愛着が消し去られたわけではない。だが同時に、これら現在のパプアニューギニア華人にとっての中国への訪問は、時代を追って変化しているのも確かである。

以上の背景を視野に入れることにより、本論文の以下の部分では、パプアニューギニア華人の中国との関係および訪中経験の変化について検討してみることにしたい。

III 移民初期の訪中

まず初期の華人の訪中について見てみたい。ドイツやオーストラリアの統治下に置かれた時期のニューギニアの華人は、中国で生まれた、いわゆる第一世代が大多数を占めていた。これらの華人の中には中国とニューギニアとを往復する生活を送る者も存在した。このような現象からは、初期の華人にとって、ニューギニアへの渡航は必ずしも移住を前提としたものではなかった可能性が見て取れる。また頻繁な往復をしない者にとっても、中国の僑郷は文字通り自己の生まれ育った地であった。そのため直接、手紙のやり取りをしたり、中国から配偶者や子供、親族や同郷者等をニューギニアに呼び寄せたりすることによる連鎖移民が存在した。

このような状況を表す例として、パプアニューギニア華人の出身地の一つである、広東省開平地域のA村で筆者が村人から聞いた話を紹介したい。この村の中には三世代前にパプアニューギニアへと移住していった華人の家屋がいまだに残されている。現在、その家屋には誰も住んでいないが、A村の住民はその家の人々のことに関する話をいくつか覚えている。住民によると、かつてその家に住んでいた男性は一度、ニューギニアに渡航し働いた後にまた村に帰ってきた。そしてニューギニアでは稼げるということを村人に伝えた。そのため数人の村人が、彼に従ってニューギニアに渡航し、その後は村に戻ってこなかったとのことである。一時帰国した際に、この男性は中国の村で犬の歯を集めてニューギニアに持って行ったということがこの村では言い伝えられている。ニューギニアに限らずメラネシアの各地では動物の歯が装飾品として珍重されることが多い。おそらくこの男性はニューブリテン島やニューアイルランド島の住民が装飾品や交

易品として犬の歯を珍重することを知り、中国に戻ってから犬の歯を集めたのだと思われる。

またそのような初期の華人のニューギニアへの移住の事例をあげてみたい。この事例はドイツ領ニューギニアに移住した華人の事例である。

〈事例1〉

この事例で述べるのは現在、ニューブリテン島のココボに居住する70代の男性の父親の話である。彼の父親は開平県出身である。年代は不詳であるが、彼の父親の兄が先ずドイツ領時代のココボに到来した。兄は始め仕立屋をしていたが、その他にも賭博をしたり酒を売ったりして金をもうけ、1か月に10ポンドを稼いでいた。兄は結婚するための資金を稼いでいたらしい。兄はその後、弟である彼の父親や祖父をニューギニアに呼び寄せた。祖父は一旦ニューギニアに来たが、その後再び中国に帰ってしまった。祖母はニューギニアには来なかったとのことである。彼の父親も同じく仕立屋として働いたそうである。父親はニューギニアで仕事をした後一旦中国に帰って結婚した。結婚後、父親は配偶者（つまり話者の母親）を伴ってココボに戻ってきた。その後も彼は仕立屋として働く一方、乗用車をオーストラリアから購入したとのことである。仕立ての仕事はそれほど忙しくなかったため、同時にタクシー業を始めたいらしい。タクシーを使用するのは主に当時ココボ周辺に居住していた白人であったとのことである。

パプアニューギニアに限らず、一般的に海外に移住する華人は先行して移住した親族や同郷者を頼ることが多い。事例の男性の父親もその例に漏れず、先に渡航して生計を立てていた兄を頼り、中国からニューギニアに移住した。このケースでは家族のうち子供が先ずニューギニアに渡航し、その後その兄弟と両親のうち父親だけがニューギニアに到来し、その後また中国に戻っている。この事例に限らず、植民地期の華人は中国の出身地の親族や同郷者と密接な関係を取り結んでいた。

頻繁な往復以外にも、移民初期の華人にとっての訪中経験として特徴的なのが、前述した、中国における子供の教育である。ニューギニアでは植民地期を通じ、国内で高等教育を受ける機会が限られていた。そのため華人の子供たちはラバウルやケビエンといった華人コミュニティがある都市の初等学校を卒業すると、中国に送られて教育を受けることが多かった。現在でもオーストラリアに居住する高齢者の中には、少年時代、中国で教育を受けた経験を持つ者が存在する。これらの人々の話を総合すると、必ずしも自己や両親の出身地である広東省の四邑地域に送られたわけではないことが分かる。彼ら彼女らは香港や広州、上海といった大都市に送られ、そこで親族や知り合いを頼り、主に広東語や場合によっては英語で教育を受けていた。このようにして数年間、香港や中国で教育を受けた後には、ニューギニアに戻り、家族とともに経済活動に従事することが一般的であった。

このような経験を持つ人々は、中国との関係を維持し、また中国に関する知識も持っており、また中国出身者や中国で教育を受けた者は中国語の読み書きや会話能力を維持していたため、中国に戻った場合も、中国の人々との会話や中国国内での移動は容易であった。パプアニューギニア華人が中国との連絡を取り続けることや、後に中国を訪れる際には、これら中国での生活経験を持つ人々が重要な役割を果たすこととなった。

このような現地生まれでありながら中国での教育経験や生活経験を持つ人々にとって、中国へ

の訪問は文字通り自己の故郷への訪問であった。また初期の華人が頻繁な往復をしていたように、自己の出身地そのものであり、親族関係や地縁関係等、具体的な生活経験に基づいた関係に依拠していたのである。

IV 現在の訪中

このような中国との関係は、パプアニューギニアでの現地生まれの華人の増加や、オーストラリアへと再移住する華人が増加することにより次第に変化していった。これは前述したように、パプアニューギニア華人の「現地化」から大きな影響を受けている。前述したように、パプアニューギニア華人は1960年代以降、パプアニューギニアで生まれた者もほとんどがオーストラリアで高等教育を受け、数年間のオーストラリア生活を経験している。また現在では大多数の者がオーストラリアで生活しているため、事実上、英語が共通語となり、また若年層の間では英語が母語となっている。このような状況の中、パプアニューギニア華人は次第にオーストラリアを志向する生活を送るようになっていった。

また現在ではパプアニューギニア生まれの者が華人コミュニティの大多数を占めることや、オーストラリアでの生活が長期化していることから、中国との関係も希薄化してきている。中国出身の世代が減少し、中国での生活経験を持たない第二世代や第三世代、第四世代が多数派を占めるのがパプアニューギニア華人の現状である。このような状況の下、パプアニューギニア生まれの者にとっては、名実ともにパプアニューギニアが彼ら彼女らの故郷としての性格を帯びるようになってきているのである [市川 2009a]。

さてこのような、いわばパプアニューギニアで現地化し、オーストラリアで生活し続ける華人の中にも中国を訪問する者が存在する。特に1978年の中華人民共和国政府による改革開放政策以降、パプアニューギニアやオーストラリアに居住する華人が中国を改めて訪問することが比較的容易になった。このような状況を受け、パプアニューギニアやオーストラリアに居住する華人の中には、中国に居住する親族との連絡を維持し続けている者だけでなく、すでに連絡を取らなくなってしまい、自分の祖先の出身村落がどこにあるのかが分からなくなってしまった人々も中国を訪問するようになった。だがこのようにすでに中国との関係が希薄化してしまった華人にとって、祖先の出身村落を訪問することは困難を伴うようになった。そのため現在のパプアニューギニア華人たちは、様々な方法を探ることにより、再び中国の出身地の訪問を試みるようになっていく。

実際に広東省開平県におけるパプアニューギニア華人のある出身村落で、村人たちからパプアニューギニア華人の帰郷についても聞いた話を紹介したい。この村（B村）からは19世紀末から20世紀初頭にかけて、ニューギニアに華人が移住していった。現在、この村を移民第一世代の孫の世代に当たる人々が訪問している。すでに中国国外で生まれ育った者が、かつての祖先の村を訪問する場合は、必ずしもその村がどこにあるのかが分からないことが珍しくない。そのためこの村を訪問したパプアニューギニア華人は、まず香港の同姓団体¹⁰を訪問し、そこで自分の祖先の

出身地の同姓団体を紹介してもらったとのことである。香港は広東語も英語も理解できる同姓団体のスタッフがいるため、パプアニューギニア華人もコミュニケーションを取ることが可能である。香港の同姓団体からB村やその近辺の同姓団体を紹介してもらうことにより、パプアニューギニアの華人はB村を訪問することが出来るのだ、と現地の人々は説明してくれた。

またこの他に、現地の旅行代理店がこのような華人の中国への訪問を手助けするという事例もある。ここでは開平市のある旅行代理店について紹介したい。開平は碉楼¹¹と呼ばれる建築群があり、その特異な景観と歴史が評価され、2007年にユネスコの世界遺産として登録された。そのため開平は観光地としても有名であり、中国内外から多くの観光客が訪問している。それを受け、開平市にも数多くの旅行代理店が存在する。その中の一つの旅行代理店の関係者によると、これらの旅行代理店は国内外の観光客のみならず、海外の華人が故郷を訪問する際の手助けも行っているとのことであった。このような観光旅行の代理店を利用することにより、パプアニューギニア華人も自己の僑郷を訪問しているのである。これらの旅行代理店は中国語だけでなく英語版の自社ホームページを作成することにより、自社のパッケージツアー等を紹介するのみならず、中国語が理解できない海外の華人に対しても、訪中のための手続きの代行や案内、通訳を提供している。関係者によると、このようなサービスを受け、海外から自己の祖先の出身村落を訪問するためのコーディネートを依頼する華人が連絡してくるとのことである。

だがこのような華人による祖先の出身村落の訪問が、必ずしも自己の中国人としてのアイデンティティを確認させ、僑郷の村人と自分たちとの共通性を強化するとは限らないという事実もある。次に挙げる二つの事例はそのような状況を如実に物語っている。

〈事例2〉

この男性は現在、シドニーに在住する50代の混血の第二世代である。彼はニューギニアにいる頃から中国の親族と連絡を取っていたとのことである。彼は2000年に訪中した際のことを以下のように語った。「中国はオリンピックの開催を控え、美しくなっていると聞いた。父の出身村落も訪問した。村人の言葉は我々と同じであった。だが彼らの態度は我々とは異なっていた。彼らから資金援助を頼まれたが、自分はすでに退職しており、金を持っていなかった。」

〈事例3〉

この男性は現在シドニーに在住する30代の第三世代である。彼は訪中経験を以下のように語る。「中国には親族が居る。1989年に訪中した際に、祖父の姉妹と会ったことがある。オジが中国に旅行に行ったので自分も一緒に行った。(筆者が祖父の村の印象について聞くと)最初の印象は、村には余り金が無いということだった。自分はホテルに泊まっていたが、村の家屋はほとんどが一階建てであり、簡素な生活をしていた。村人は自分に対し、おおむね親切にしてくれた。だが中国に行った後も、自分の故郷はラバウルだと思っている。そこで生まれ育ったからだ。」

このように祖先の出身村落への訪問が、自己と中国に居住する人々との間の差異や、パプアニューギニア華人としての自己認識を再認識する契機となることもある。そのためパプアニューギニア華人による僑郷の訪問は、自己の祖先のルーツを探る旅としての性格を持つと同時に、自分たちと僑郷の人々との差異を再認識する結果にもなっている。

また現在のパプアニューギニア華人の訪中で特徴的なのは、必ずしも自己の祖先の出身地を訪問する人々だけでなく、中国の他の地域を訪問する人々も存在することである。実際、筆者がパプアニューギニアやオーストラリアで現地調査を行っている際には、中国を訪問したと語る華人としばしば出会うことがあった。だが良く話を聞いてみると、広東省の僑郷を訪問したのではなく、中国の別の地域を訪問したことがあり、祖先の出身村落を訪問したのではないと説明されることが多かった。中国を訪問するパプアニューギニア華人の主な訪問地は北京や上海、広州といった大都市や、桂林や大理、麗江、黄山といった名勝古跡、さらには香港やマカオ等である。これらはどれも有名な観光地であり、パプアニューギニア華人の祖先の出身地とは直接の関係はない。

これら中国の観光地を訪問するパプアニューギニア華人は、自己のルーツを探るという目的も当然持っていると考えられる。だが同時に、祖先の出身地とは直接の関係がない中国の都市や観光地を訪問するという事実からは、彼ら彼女らにとっての訪中とは、ルーツ探しよりもむしろ観光の一環としての性格が強いことをうかがい知ることができる。実際に口語としての広東語の四邑方言は理解する者が存在するものの、標準中国語を話せる者はほとんどおらず、漢字の読み書きも一部の高齢者を除いては出来ないパプアニューギニア華人たちは、たとえ中国を訪問したとしても、旅行代理店を通さず、通訳や観光ガイドを伴わずに旅行することは困難を伴う。彼ら彼女らの中国訪問は、共通する言語や生活様式を確認するというよりも、海外旅行としての性格の方が強いのである。

このような現地化した華人たちの訪中の中でも特に特徴的だと思われるのが、オーストラリア在住のパプアニューギニア華人が組織する団体が開催する海外旅行である。シドニーやブリスベンに居住するパプアニューギニア華人はキリスト教団体や親睦団体を形成している。その中の一つである、PNGCCAA (PNG Chinese Catholic Association Australia) は、シドニーに居住するパプアニューギニア華人たちによって1980年代に設立された。PNGCCAA はシドニーに居住するカトリック信者のパプアニューギニア華人たちが交流する場と機会を提供することを目的として設立された。そのため PNGCCAA は教会内でのミサや会員の自宅での祈祷会、クリスマス・パーティー等を定期的で開催している。またスポーツ大会やピクニック等の親睦活動も開催しており、会員にニューズレターを発行することにより、会員相互の親睦と連絡の維持を目的として活動している。PNGCCAA はパプアニューギニアとオーストラリアの双方に分散して居住している人々を対象とした、パプアニューギニア華人を会員とした親睦組織である¹²。

この PNGCCAA の活動の中でも本稿が特に注目したいのは、会員を対象として組織される団体旅行である。PNGCCAA はキャンベラやクイーンズランドといったオーストラリア国内の旅行に加え、海外旅行も定期的に組織している。ニュージーランドやバヌアツ、ベトナム等の国々への訪問がなされているが、これらに加え中国を訪問する旅行もしばしば実施されている。だがこの場合も彼ら彼女らの祖先の出身地である広東省の僑郷を訪問する旅ではなく、北京や上海、雲南省といった地域への訪問がなされている。実際に中国を旅行する人々が自己のルーツを探るという意識を持っているかどうかは明らかではない。だが祖先の出身村落ではなく、一般の外国

人と同様、中国の主要な観光地を訪問することが主目的となっているのは明らかである。

V 帰郷から観光へ

以上の状況を踏まえ、パプアニューギニア華人にとっての訪中経験の特徴について考察してみたい。

パプアニューギニア華人の訪中の変遷で明らかに見て取ることが出来るのが、中国生まれの世代の訪中から、パプアニューギニア生まれの世代の訪中へと主体が変化していることである。中国から移住していった時期から現代に至るまでにすでに100年以上の年月が過ぎ、その間に華人の現地化も進行して行った。パプアニューギニアにおける華人の現地化は、華人の生活様式や自己認識を変化させ、居住地や再移住先に対する愛着や帰属意識を変化させてきたが、これは同様に、中国に対する観念と実践も変化させることになったのである。

植民地期の中国への訪問に見る特徴は、自己の直接の出身地への訪問という部分で、文字通り「帰郷」という性格が強かったことを指摘できる。中国の広東省四邑地方は文字通り彼ら彼女らの生まれ故郷であり、そこからニューギニアへと移住していった。最初期の華人の中にはニューギニアと僑郷との間を頻繁に往復した者も存在するが、このような人々は出身地と密接な関係を維持していたということが分かる。

だがこのような移民第一世代に見られた中国への訪問に関する観念と実践は、現地生まれの世代が増加することによって次第に変化していった。本論で検討してきたように、この変化は、パプアニューギニア生まれの世代の増加、宗主国オーストラリアと中華民国、中華人民共和国との外交関係、オーストラリア国籍に伴う使用言語や居住パターンの変化、近年の中国の国際的なプレゼンスの上昇といったパプアニューギニア華人を取り巻く様々な状況からの影響を受けて来たのである。このことから、華人の現地化は単に居住地における生活経験だけでなく、それを取り巻くより広い社会的背景から理解する必要があることを喚起する。

このような状況の下、華人の現地化は、居住地に対する帰属意識のみならず、かつての出身地に対する意識も変化させている。これは移民とその子孫にとっての故郷とは、必ずしも、世代を追うことにより帰属意識が出身地から居住地へとシフトしてゆくという一方向的なモデルだけで説明することはできないことを意味している¹³。華人に限らず移民の現地化に関しては出身地から居住地へとという単線的な現地化の過程ではなく、様々な要因との関係の中で複雑な現地化の過程を経ることに留意する必要がある。本稿で議論してきたように、パプアニューギニアにおいても華人は現地生まれの世代が増加することにより、現地化の度合いを深めている。だがそれは単なる現地のパプアニューギニア人社会の中に同化してゆくことを意味しないし、彼ら彼女らの生活空間がパプアニューギニアの中だけで完結することも意味しない。オーストラリアでの教育経験や生活経験も彼ら彼女らの生活の中で無視できない意味を持っていることからそれは明らかである。

またかつて第一世代がニューギニアへと移住して行った時代の清朝や民国期の中国と異なり、

現在の中華人民共和国が華人にとって果たした役割も無視することができない。改革開放期以前の中国と以後の中国による華人への対応の変化も、パプアニューギニア華人の訪中経験を形作っているのである。

このようなパプアニューギニア華人の訪中経験は、かつての中国出身世代や中国で教育を受けた世代による「帰郷」という性格から、パプアニューギニア生まれの世代やオーストラリアで教育を受けた世代の増加による「観光」という性格がより強くなってきていると表現することができる。観光とは楽しみのために日常の生活空間から離れ異なる空間を訪れることだとすれば、パプアニューギニア華人にとっての近年の訪中は、観光そのものであると言える。もちろんそこにも自己のルーツを探るといった部分は存在する。だが実際に広東省の祖先の村々を訪問するよりも、むしろ北京や上海、桂林といった中国国内の観光地を訪問し、村落を訪問する場合も村の中にとどまるよりも街中のホテルに宿泊するといった点で、より観光としての性格を強く持っていることは否定することができない。そのためパプアニューギニアの華人にとっての訪中経験は、パプアニューギニアにおける華人の第一世代から現地生まれの世代への変化と共に、中国、パプアニューギニア、オーストラリアといった様々な地域との関係の中で現地化を遂げていった。そしてその現地化過程は、居住地における帰属意識だけでなく、世代ごとに異なる中国への観念と実践も変化させ、それが自己や祖先のルーツを探る帰郷という性格の訪問から、楽しみを主目的とした観光という性格が強い訪問へと変化させていったのである。

ディアスポラが世代を越えて共通する性格をもっているという本質的な見方は、多くの研究者によって批判されているが、これは同様に、彼ら彼女らにとっての故郷が帰還すべき地として認識されているわけでもなく、世代を越えて同じく認識されているわけでもないことも意味している。帰郷から観光へという訪中の性格の変化は、パプアニューギニア華人の現地化の多義性と故郷に対する関係を表しているのである。

〈註〉

1. 本稿が事例として扱うパプアニューギニア華人は、自称として「華人」という言葉を使用することはない。広東語による自称は「唐人」や「新幾内亜唐人」であり、英語による自称は単に「Chinese」と言うか、「PNG Chinese」や「Niugini Chinese」である。ただし本稿では用語法上の混乱を避けるために、彼ら彼女らを指す語として、海外に居住する中国系移民およびその子孫を指す総称である「華人」という用語を使用することとする。
2. 本稿の内容はパプアニューギニア、オーストラリア、中華人民共和国における現地調査に依拠している。これらの現地調査は 文部科学省科学研究費補助金プロジェクト「パプアニューギニアにおける森林開発を通して見たマレーシア華人のネットワーク」(代表:市川哲)、文部科学省科学研究費補助金プロジェクト「パプアニューギニアにおける自然環境の資源化と「開発」思想の形成」(代表:豊田由貴夫)、愛知大学現代中国学研究センター共同研究「「和諧社会」との対話:文化的公民権から見た華南における周辺のグループ」(代表:奈倉京子)からの援助を受けることによって可能となった。
3. この問題については市川(2009b)で詳述した。
4. 2000年代になりパプアニューギニアには中国の福建省福清地域の出身者が増加するようになった。これらのニューカマーたちは、植民地時代に移住してきた華人とは異なるネットワークを用いてパプアニュー

ギニアに到来し、自己のコミュニティを形成している。

5. 1884年にニューギニア島の南東部をイギリスが、同年、北東部をドイツがそれぞれ領有した。イギリス領ニューギニアは1905年以降、オーストラリアの統治下におかれ、オーストラリア領パプアとなった。両地域は1975年に共にパプアニューギニアとして独立した。そのため本稿では独立以前の当該地域を指す場合はニューギニア、独立以降の当該地域を指す場合にはパプアニューギニアという語を用いすることとする。
6. 現在ではほぼ全てのパプアニューギニア華人がキリスト教徒であり、カトリック信者とメソジスト信者が大多数を占めるという特徴がある。
7. 1960年代までニューギニアの華人はオーストラリア保護民 (Australian Protected Person) という立場に置かれ、白豪主義政策を採るオーストラリアには自由に入国することが出来なかった。
8. 現在でも60代以上の華人たちは広東語を理解する者がいるが、若年層の中には広東語を話せない者も珍しくなく、漢字の読み書きは高齢者も含め、ほとんどの者が出来ない。
9. このような彼ら彼女らの連続的な移住経験と故郷認識については別稿で詳述した [市川 2009a]。
10. 同姓団体は中国語で「宗親会」と呼ばれることが多い。宗親会は姓を同じくする父系出自集団をメンバーとする相互扶助組織であり、中国国内のみならず、海外の華人社会でも発達した。
11. 19世紀末から20世紀初頭にかけて、中国に帰国した海外の華人により建設された、塔の形をした高層建築である。当時、中国南部は盗賊の横行や戦乱のため治安が悪化したため、碉楼は村人が外敵からの攻撃を防御するトーチカとしての役割を果たしていた。また碉楼は中国的な建築様式に加え、華人たちが生活した欧米の建築様式からも影響を受けている点で特異な建築物とされている。
12. PNGCCAA の組織と活動に関しては別稿で詳述した [市川 2005]。
13. 移民によるかつての出身地の訪問に見られる、望郷の念や故郷の人々と戻った移民との差異化、相互の反目や葛藤、新たな自己認識の誕生といった多様な経験については、主に文化人類学的な帰還移民研究の中で詳細に検討されている [e.g. 大川 2010; 奈倉 2010]。本稿もこのような帰還移民が故郷に対して持つ可塑的で多面的な意味に注目する問題意識に依拠している。

〈参考文献〉

日本語

- 市川哲 (2005) 「華人のエスニシティと宗教：オーストラリアにおけるパプアニューギニア出身華人のキリスト教団体」『宗教と社会』第11号、3-24頁。
- (2009a) 「新たな移民母村の誕生：パプアニューギニア華人のトランスナショナルな社会空間」『国立民族学博物館研究報告』第33巻第4号、551-598頁。
- (2009b) 「移住経験から見るサブ・エスニシティの説明方法：パプアニューギニア華人を事例として」『社会人類学年報』第35巻、121-137頁。
- 大川真由子 (2010) 『帰還移民の人類学：アフリカ系オマーン人のエスニック・アイデンティティ』明石書店。
- 可児弘明編 (1996) 『僑郷華南：華僑・華人研究の現在』行路社。
- 山岸猛 (2005) 『華僑送金：現代中国経済の分析』論創社。
- 山下清海 (2002) 『東南アジア華人社会と中国僑郷：華人・チャイナタウンの人文地理学的考察』古今書院。

英語

- Chin, James (2008). "Contemporary Chinese Community in Papua-New Guinea: Old Money versus New Migrants", *Chinese Southern Diaspora Studies*, 2, pp. 117-126.
- Douw, Leo, Cen Huang & Michael Godley eds. (1999). *Qiaoxiang Ties: Interdisciplinary Approaches to 'Cultural Capitalism' in South China*, London, New York, Leiden and Amsterdam: Kegan Paul International in

association with International Institute for Asian Studies.

- Inglis, Christine (1997). "The Chinese of Papua New Guinea: From Settlers to Sojourners", *Asia and Pacific Migration Journal*, 6(3/4), pp. 317-341.
- Kuah, Kun Eng (2000). *Rebuilding the Ancestral Village: Singaporeans in China*, Aldershot, Brookfield, Singapore and Sydney: Ashgate.
- Louie, Andrea (2003). *Chineseness across Borders: Renegotiating Chinese Identities in China and the United States*, Durham and London: Duke University Press.
- Tan Chee-Beng (2007). "Introduction: Chinese Overseas, Transnational Networks, and China", in Tan Chee-Beng ed., *Chinese Transnational Networks*, London & New York: Routledge, pp. 1-19.
- Wu, David Y. H. (1982). *The Chinese in Papua New Guinea: 1880-1980*, Hong Kong: Hong Kong University Press.

中国語

- 奈倉京子 (2010) 『“故郷” 与 “他郷” — 広東帰僑の多元社区、文化適応—』 北京, 社会科学文献出版社。
- 庄国土編 (2000) 『中国僑郷研究』 厦門, 厦門大学出版社。